

平成19年度企画展レポート

第32回企画展 「むかしの住まい暮らしと家畜」

むかしの農家は日々の生活において牛馬は大事なものであり、家族同様の扱いをしながら、家畜とともに豊作を祈り家畜に感謝したのです。

また、馬は神様の乗り物として考えられたり神仏に絵馬を奉納する祈りの形態も広く見られるところではあります。

農村の家屋は、住まいだけではなく生業である農業の諸作業や生産の場としての機能も兼ね備えたもので、岩手県に多く見られた南部の曲屋はこれらの機能のほか、厩の突き出しが右か左になっており東南の方向をL字型に抱いているような向かいとなっています。日当たりの良い位置で馬の出し入れがしやすく厩を持つことの誇りと馬の飼育に対する熱意と愛着が感じられる造りです。

役畜利用年代の経営の考え

近世の重税下での農業は生産を高めるより経営費のかからない方法を模索しました。生産費の自己調達如何が経営を左右し自給自足の経営の中で役畜での耕耘、運搬、肥料生産の三つの機能を果たしながら経営の節約と能率の向上を目指しました。

平成19年2月20日～5月31日

馬の神信仰・絵馬

滝沢村の「チャグチャグうまコ」は旧暦五月の端午の節句に飾った馬に乗って蒼前神に参詣する行事。厳しい仕事に従事する馬に感謝し健康と安全を祈りました。他に、岩手県では駒形神、白山神（おしらすさま）、馬櫛神、馬頭観音、青朝宮などが見られ、馬の息災安全や死んだ愛馬を葬り冥福を祈ったり、交通に苦勞する所や追分けなど道標を兼ねて配している例も見られます。

絵馬は馬やその他の絵を描き、祈願あるいは感謝の為に神社に奉納された額。あるいは逆に神社から授けられ馬屋に飾っているものもあります。



第33回企画展 「昔の暮らしと囲炉裏の火」



現在のように、石油・ガスなどが使えなかった時代では、日に三度の食べ物を調理し煮炊きする台所、その中心にある「囲炉裏」の存在意義は大きいものでした。

囲炉裏の火は多用途に富み、毎日の「炊事の火」であり、寒い季節は「暖房の火」となり、そして夜は「照明の火」となって家族の顔を照らした。

また囲炉裏端は一家の「食事の場」であり、家族の「休憩・団樂の場」となり「夜なべ仕事の場」にも使われた。そして時には「来客の対応の場」ともなり正に「家の中心」であったと言えます。

平成19年6月1日～8月31日

囲炉裏は、台所のほぼ中央に作られそこからは入口や出口が見渡せ人の動きや厩の家畜の様子や炊事場の火の始末まで。居乍らにして見届けできるなど理にかなった位置に作られていた。

また、踏み込み用囲炉裏では普通は敷き板を置いて使い、農繁期には敷き板を取り除き土足のまま使用できるよう工夫されていた。

人類は火を使う事により、他の動物とは数段違った進化の道を歩み始めたと言われ、火は文明発展の長い歴史の中で多くの物の進歩発展に大きく関係してきたと言える。火は、あらゆる物を焼き尽くす猛烈な破壊力と不浄不要物を焼き払う清浄力・魔力を感じさせるなど、人類に畏敬の念を惹起し火の神の信仰を生むに至ったと言われている。この企画展では炊事・関連用具として鍋・釜 15 点、桶・樽・瓶類 12 点、暖房関連 12 点、照明関連用具 10 点、調理・加工関連用具 25 点、食膳・食器 25 点を展示し、昔の囲炉裏端を中心とした暮らしの側面を再現しました。

第34回企画展 「岩手の畑作・農機具の変遷」

平成19年9月5日～11月30日

岩手の畑作地帯と作目の推移

昭和中期までの岩手の畑作は、北上山地を中心として北部から下閉伊郡、東南部にかけて広範にわたっていましたが、高標高地で耕作地が狭く多くは傾斜地でした。

また、作物の作付けは県中北地域ではひえ、麦、大豆の二年三毛作が多く、これらの作物は主、副食として食べたほか、これら作物の茎やくず物は家畜の飼料や敷料としても優れており、特にも稗は水稻など冷害の受けやすい環境でも良く育ち、貯蔵にも耐えるので備荒作物、救荒作物として古来より作付けされてきました。



県南部では麦と大小豆、麦と葉たばこや野菜など冬作物と夏作物との組み合わせで一年に二種類の作物を作っていました。

昭和中期以降の県中北地域は雑穀主体の農業から水田や酪農、それに野菜や花き、果樹、特産物への転換により換金作物が急増し、労働力の不足による耕作放棄地と林地への転用などによって畑地は減少してきた経緯があります。

この企画展では、明治から昭和中期頃までの畑作作業で使われていた農(機)具の移りかわりを展示、時代を追うごとに使いやすく改良されてきた様子を紹介しました。

第35回企画展 「木で作った容器」

人類が原始生活を始めた当初から、自然の樹木は身近に得られ、多くの場面で活用された最たる物でした。木の実は食料に、葉や樹皮は衣類に、幹や枝は居住し風雨寒暑をしのぎ火を使う生活には欠かせない物でした。以来進化と共に樹木を生かし多様に使いこなしてきた。この我国の伝統的な技術は世界に誇れる勝れた文化遺産と言えます。

展示した木製の容器は炊事調理用器の椀・皿・運搬や貯蔵用器の桶・樽・家具家財を入れる箱類などおよそ100点です。現在使われている容器の材料は瀬戸物、陶磁器、ガラスや各種金属、エポナイト、プラスチックなど時代と共に其の主流は変わってきています。



平成19年12月5日～平成20年2月28日



ガラスビン、ペットボトル、アルミやスチール缶、ダンボール箱など容器は使い捨てが普通の世の中、物不足時代は「計り売り」が一般的で酒、醤油、油は樽や瓶から小分けにして買い、また買い物籠や買い物袋を持ち歩く事が当然でした。木製の容器は丈夫で長持ちする事と修理(タガを結直し蓋や底を入替え、楔や鉋で補強)する事により、繰り返し使用が可能です。また用途により樹種や原材料の選択が可能です。大きさや形など好みに合わせて作れる利点があり金属やプラスチック等と異なり素材から受ける自然の魅力と手作りに近い温もりは木の持つ良さと言えます。

博物館・公園トピックス

博物館へようこそ

平成19年4月～12月までに農業科学博物館に学級等団体で入館された小、中学校等の入館者は35校(団体)1,650人で小学校が16校940人、人数では57%を占めております。たくさんの感想文をいただきました。

幼稚園	6園	378人	大学	2校	61人
小学校	16校	940人	養護学校	1校	45人
中学校	3校	117人	子供会	3団体	76人
高等学校	1校	20人			



子供体験講座

～お正月のミニ松飾り～を作ってみよう

平成19年12月27日

農業科学博物館では「冬休み子供体験学習」を小学4年生以上の児童とその保護者を対象に実施しました。参加者は12組23名で紫波町の畠山ユリさんの指導でミニ松飾りを作りました。

卓上サイズの松飾りは親子で協力し合いながらこもを巻いた空き缶に砂を入れ青竹や松を見栄え良く差し込み梅や稲穂などを飾り付けて完成させ、正月を迎える準備ができたとそれぞれの自宅へ持ち帰りました。



第36回企画展のお知らせ

「蚕の飼育・製糸用具と絹製品」

平成20年3月5日～5月31日

明治時代から昭和中期にかけて生糸は国の重要な輸出品として位置づけられ、保護奨励政策のもとで生産が進められ、我が国の近代化に貢献してきました。

レイヨン製品の出まわりや安い外国産生糸により生糸は市場性を失い国内生産は減少傾向にあります。天蚕などで新たな生糸生産を模索する動きも見られています。

この企画展では昭和中期頃までの家蚕飼育用具を展示しながら天蚕などについても紹介をします。



新展示コーナー

「宮澤賢治による土壌調査」



大正6年、稗貫郡役所(現花巻市)が盛岡農林高等学校(現岩手大学)土壌学教授の関豊太郎博士に依頼し、大正7年稗貫郡管内の土性調査をしております。この調査に当時在学していた宮澤賢治が調査員として詳細に調査し、土性分布状況を図面にして調査報告がされておりますが、これら図面と調査報告書等を「宮澤賢治コーナー」として展示しております。

旧岩手県立農事試験場(現農業研究センター)では、大正7～10年にかけて県内各郡ごとに土性調査を実施し11～12年に「郡土性調査報告」として報告しておりますが、稗貫郡については関博士の調査報告書を引用して報告書を作成したようです。